

## はしがき

本書は令和版の「弁護士始末記」である。

大蔵省印刷局が官報の姉妹誌として発刊した『時の法令』誌に、一九八〇年から二二年間にわたって掲載された名物連載が「弁護士始末記」であった。

立法担当者による法令解説が中心の同誌に弁護士の手による個別の事件解決の話が載るといふ異色の趣向だったが、書籍化が三〇巻まで続く息の長い連載となった。

令和の時代に、これを蘇よみがえらせた。協力してもらえないか。

当時の編集長が、キャリアの浅い私のような弁護士になぜそのような相談をされたのか今となっては不明だが、弁護士が担当事件について率直に語る連載は、ありそうで、実はあまりなく、確かに法律を身近に感じるきつかけになるなど頷うなずかされた。

熱意にいささか怯ひるんだものの、当初から力んで漕ぎ出すのではなく、まずはゆるゆるとでも進水し、沖に向かう最初のお手伝いであれば、と初期の書き手のアレンジをお引き受けしたのを覚えている。

弁護士に担当事件を語ってもらう、という企画を令和の時代に蘇らせるには苦勞もあった。特に守秘義務の扱いである。

昭和の頃の記事には、こんなことまで書いてしまつてよいのかというような記載もあった。当時の弁護士諸氏の間でも、この点については議論がなされたそうである。弁護士の守秘義務自体は不変のものなれど、時代が移ろうにつれて人々の感覚も変化する。この点は特に気を配った。当事者の了解を得るか、または、当事者を推知できないようにフィクションを織り交ぜるように配慮してもらつた。それでも、その事件を通じて伝えたい肝の部分には押さえられていると思つてゐる。

時の法令誌上で弁護士CASE FILEの連載はいまも続いている。本書に収めた一四本は、そのうち早稲田リーガルコモンズ法律事務所所属の弁護士の執筆を集めた。

本書の編集にあたっては、後任の編集長、そして発行元の株式会社朝陽会にも多大なご尽力を賜つた。記して感謝したい。

本書所収の一四本を読むだけでも、弁護士の仕事は十人十色であること、そしてその魅力が伝わるのではないだろうか。

本書が法律や弁護士の仕事を身近に感じる一助になることを願つてゐる。

二〇二二年八月

弁護士 河崎健一郎（早稲田リーガルコモンズ法律事務所代表弁護士）

# 目次

- 1 路上の事件簿 河崎健一郎 1
- 2 介護事故で骨折した後、  
誤嚥性肺炎で姉が亡くなった  
——死亡の責任を施設に問えるか？ 原島有史 14
- 3 ある事業承継ものがたり 村方善幸 29
- 4 ウーバーイーツユニオン結成の意義 川上資人 39
- 5 情報公開法改正法案の起案に  
携わって 森山裕紀子 49
- 6 刑事弁護のもう一つの側面 小泉恒平 59
- 7 記憶に残る弁護 水橋孝徳  
——再度の執行猶予中の男性 69
- 8 集会を見守る 竹内彰志  
——抗議の路上で弁護士ができること 79
- 9 私の原点 趙 誠峰  
——二つの事件が教えてくれたこと 87
- 10 北朝鮮政府を訴える 福田健治 95
- 11 「家庭」で起きる重大事件の弁護 高橋宗吾 104
- 12 子どもをサポートする仕事 西野優花 115

13

「セックスワークにも  
給付金を」訴訟

三宅千晶

——職業ステイグマに立ち向かう

124

14

誤認逮捕

齊藤裕也

——冤罪事件に立ち向かった一九日間

140